

「九州建設技術フォーラム2026」AI、ICTなど新たな建設技術を紹介
産学官が技術情報を発信、展示やプレゼンテーションで連携を深める



開催された、九州建設技術フォーラム2026



挨拶する園田実行委員長

九州の建設技術における産学官の連携を目的とする「九州建設技術フォーラム2026」が5、6日の2日間、福岡市の福岡国際会議場で開催された。今回で23回目となるフォーラムのテーマは「AIが拓く社会インフラの未来～ICTが産み出す土木の技術イノベーション～」。初日の5日は、企業、大学、行政機関、などから多くの参加者が会場を訪れた。主催は産学官で構成する九州建設技術フォーラム。

園田佳臣実行委員長（九州大学工学研究院教授）は、開会にあたり、会場参加者とオンライン視聴者に感謝を述べたうえで、近年、国内外で相次ぐ自然災害に言及した。「私たちは、いつ起こるかわからない巨大地震への備えに加えて、気候変動に伴って激甚化する豪雨、水害、土砂災害にも向き合わなければいけません」と述べ、従来の経験や考え方だけでは対応できない災害が現実となる中、「防災、減災、そして社会インフラを根本から考え直す時期に来ているように思われます」と強調。一方、AI、ICT、ロボット、デジタル技術の進展にも触れ、建設分野では「調査、計画、設計、施工、維持管理、さらには防災へと、さまざまな可能性が広がっております」と期待を示した。こうした技術の活用が、喫緊の課題となっている担い手不足の解消にもつながることを期待した。「ぜひ展示をご覧くださいだけでなく、説明される方と直接言葉を交わして、新しい連携につなげてほしい」

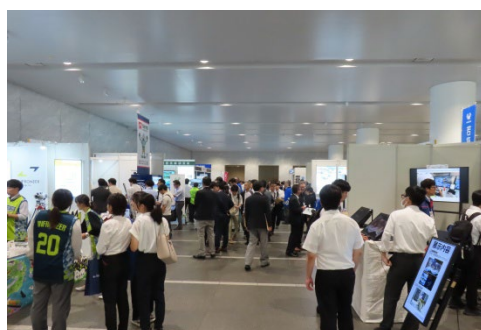
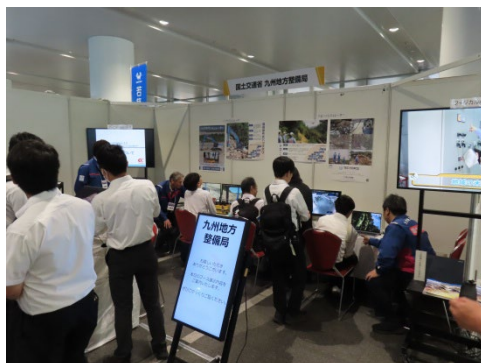
と参加者に呼びかけた。最後に、「この2日間が、新しい技術、新しい発想、そして新しい人との出会いの場となり、ここから社会インフラの新しい未来につながる取り組みが生まれることを願っております」と述べ、あいさつを締めくくった。

開会式後には、倉爪亮教授（九州大学大学院システム情報科学研究院）による基調講演が行われた。テーマは「環境情報構造化に基づくサービスロボット・土工ロボットシステムの実現」。講演の様子はY o u T u b eにてW E B配信された。

1 F、2 Fに設置された95のブースには、「インフラDX」「安全・防災」「維持管理」「環境」「品質」「コスト」「学会」に分けて技術情報を展示。プレゼンテーション、ポスターセッション、自治体によるパネル展示なども実施された。特に、実演・体験コーナーが設けられた1 Fロビーには、訪れた学生たちが説明を熱心に聞き入っていた。

会議室では、学生向けのリクルーティングプレゼンテーションもあり、参加機関がそれぞれの魅力をPR。写真や図、イラストなどを使った紹介では、土木の魅力を分かりやすく伝え、「ものづくり」の大切さや、社会インフラを支える仕事の魅力を紹介。参加機関は、国土交通省九州整備局、福岡県、（一社）日本建設機械施工協会九州支部、（一社）日本建設業連合会九州支部、（一社）建設コンサルタント協会九州支部、（一社）プレストレスト・コンクリート建設業協会九州支部、特定非営利活動法人九州コンクリート製品協会、（一社）日本道路建設業協会九州支部、（一社）日本橋梁建設協会九州事務所

学生を引率して参加した教員は、フォーラムについて「いろんな会社が参加しているから、会社を知るという意味では非常にいい機会だなと思います。就職先が決まった先輩からも、後輩に「行った方がいい」と勧められている」といい、学生にとって建設業界の企業を具体的に知る機会となっている。また、フォーラムの展示については、「ICT技術、AIを活用した技術がどんどん増えています」と、技術の進展を実感。体験型の展示など、展示内容の変化にも注目していた。



技術に触れる学生たち